

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	法政大学	拠点番号	D 1 7
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称 (英訳名)	日本発信の国際日本学の構築(Declaration of International Japan-Studies)		
研究分野及びキーワード	＜研究分野: 日本文化＞(異文化)(国際化)(ネットワーク)(リアルタイム)(フィールドワーク)		
専攻等名	人文科学研究科日本史学専攻・日本文学専攻、社会学研究科政治学専攻、国際日本学研究所、野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 中野 栄夫 教授 他 16名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成16年1月現在）を抜粋

＜本拠点がカバーする学問分野について＞

日本史学・日本文学・政治学、能楽・沖縄に関する研究。そしてそれらを総合した「国際日本学」の構築。

＜本拠点の特色及びその目的等＞

「日本発信の国際日本学の構築」をめざした本研究拠点の基本的コンセプトは、「異文化研究としての日本学」という視点の導入と、「日本文化の国際性」の解明とである。ここでは、日本人研究者の日本研究それ自体のみではなく、日本を「異文化」として研究している外国人研究者の研究を対象とし、「メタサイエンス（学問の学問）」的研究方法によって研究を推進していく。このことにより、国際的観点から新たな「国際日本学」が構築されると考える。さらには、外国人の観点・認識・研究方法などを批判的・包括的に摂取・吟味することによって醸成される新たな認識を通じて、「日本文化の国際性」のあり方が新たに提示され、日本人による日本研究も認識し直される。また、日本を一枚岩と見ずに、蝦夷・アイヌ、琉球・沖縄等の問題も「日本の中の異文化」の問題として対象化することによって、日本学研究に多角的な国際的観点が導入される。これら成果はWEBも活用して発信する。

このような本拠点の研究は、これからの国際社会にとって必要かつ重要であると考えます。

＜COEを目指すユニーク性＞

本拠点では、独自の方法論として「メタサイエンス」を提唱した。ここで我々が試みようとしているのは既成の日本研究ではなく、「メタサイエンス」的方法を実践することである。従って外国人が「日本」をどのように認識しているかについて、日本人研究者ばかりでなく、外国人研究者と共同で、外国における日本研究の発掘と紹介、それらの分析作業を進めている。具体的には、現在中国の若手研究者の新しい日本研究を論集として編纂し、本学センターの中国人教授を中心に、それらの研究の評価、分析をも実施しつつある。これにより新しい国際日本学の構築が可能となろう。そのため外国人研究者の協力体制が必要不可欠のものとなる。その際、非英語圏に特化し、WEBを活用するのも本拠点の特色の一つである。

＜本拠点のCOEとしての重要性・発展性＞

日本には他に「日本学」研究機関はあるが、それらは日本史・日本文学・民俗（族）学・考古学などを総合しての研究で既成の方法論に留まっている。「メタサイエンス」を掲げる本拠点は重要性・発展性があると確信する。

＜本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果＞

本拠点は外国人の研究を対象としているので、外国人研究者にとっても国際的拠点の一つとなり、日本における重要な研究機関として成長するものと確信する。また、若手研究者育成プログラムとして「国際日本学インスティテュート」を設置したので、次代を担う有為な若手研究者を世に送り出す体制ができるものと自負している。

＜背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等＞

日本には国立の研究機関である国立歴史民俗学博物館・国立民族学博物館・国際日本文化研究センターなどがあり、その成果は大きい。しかし、それらは「日本研究」そのものであり、本拠点が掲げる「メタサイエンスとしての国際日本学」とは異なるので、本拠点の研究は特色ある大きな成果が期待できる。また、外国（非英語圏）の研究者との協力連携を重視しているのも特色である。本拠点は、当該研究領域に関する世界的研究拠点形成を目指しているが、このことは、他の研究領域や学問領域との積極的交流を志向する必要性も生じる。「国際日本学の構築」は、他国における同様の研究成果や手法の比較・分析を可能とし、国際的な学術交流を大きく推進する可能性が出てくる。本拠点の研究は、このような発展性・波及性をもつので、その学術的・社会的意義は大きいと確信している。

機 関 名	法政大学	拠点番号	D 1 7
拠点のプログラム名称	日本発信の国際日本学の構築		

◇ 2 1 世紀 C O E プログラム委員会における評価

（総括評価）

現在までの進捗状況等に鑑み、今後の努力を待っても当初目的の達成は困難と思われるので、拠点形成を継続するためには、下記のコメントに沿って、当初目的を絞り込んだ上で当初計画を大幅に縮小することが必要と判断される。

（コメント）

「国際日本学の構築」を、メタサイエンスの方法による「異文化研究としての日本学」と「日本文化の国際性の解明」に着目して実現するという当初の斬新なもくろみが、これまでの研究活動の成果と進捗状況には全体として反映されているとは残念ながら認められなかった。しかもヒアリングにおいて、メタサイエンスに関する概念検討の結果と、それにもとづく実証研究の成果が、既成の方法による日本学を超えるものとして提示されることはなく、外国人の研究を重要な核とするタスクフォース間の研究連携と全体構想との関連が実態としても不明瞭である。これに加え、「日本の中の異文化」に関する視点からの新しい日本学についての知見の提示が見られない。また、非英語圏における日本学の研究をもととした国際日本学の提唱を英米語圏における研究の相対的検討のうえで構築する視点が、その重要性にもかかわらず十分に取り込んでいただけなかった。

これらの諸点を勘案すると、本研究における理論、研究組織、研究実践の面で当初の計画遂行は困難な状態にあり、現状では今後2年間で当初の目的を達成することは難しいと判断せざるを得なかった。

以上の評価を貴大学に示したところ、貴大学からは大幅に絞り込んだ修正計画案が提出された。その内容は、学長の強いリーダーシップのもとで、①メタサイエンスの方法による理論構築を促進する、②8つのタスクフォースを4つに整理・統合することで機動的な研究連携を達成することを骨子とするものであった。

この計画案について、調整部会において慎重に審議・検討した結果、今後2年間で達成することが概ね期待できると認められ、拠点形成を継続することが妥当と判断した。

なお、継続にあたっては、研究の焦点を大幅に絞り込んだ修正計画案にふさわしい副題を付していただきたい。また、拠点形成計画が、適切かつ着実に遂行されるよう、1年後に調整部会において進捗状況について確認することとする。